

車椅子用車室利用者が求める「入口近くへの配置より重要なこと」

誰もが移動を楽しめる社会のため 駐車場に“福祉の気づき”を

森井 清

『パーキングプレス』発行人
サイカパーキング株式会社 代表取締役社長

松本 由香

有限会社総真興業 代表取締役
一般社団法人広島県インクルーシブフットボール連盟 理事・副会長

【プロフィール】 松本 由香（まつもと ゆか）

小学校から始めたバスケットボールを高校まで続け、中学校では剣道部で初段を取得。短大時代は大学祭実行委員会に所属し大学祭の企画運営などに携わる。1995年両親が経営する有限会社総真興業に事務として就職。2007年に父が他界し、2009年より母が病に倒れたことをきっかけに代表代行として業務を行い、2024年5月代表取締役に就任。

2013年A-Pfeile広島AFCを通じ障害者サッカーチームに関わり、2019年A-Pfeile広島WFC（ウォーキングフットボールクラブ）を立ち上げ代表に就任。同年一般社団法人広島県インクルーシブフットボール連盟を有志で立ち上げ2019年事務局長、2024年副会長。2022年公益社団法人広島県パラスポーツ協会理事、2023年一般社団法人日本ウォーキングフットボール連盟理事

機械式駐車装置は都市部の限られた土地の有効活用や、集合住宅の居住者用駐車場として広く普及している。その一方、文字通り「機械じかけ」であるがゆえに適切な保守管理が不可欠であり、そのため日々、全国各地でメーカーによって、あるいは専門的な知識や技術を有する事業者によって、必要なメンテナンスが行われている。今回の対談のゲストは広島県で機械式駐車装置の施工・メンテナンスを手掛ける有限会社総真興業 代表取締役 松本由香氏。一般社団法人広島県インクルーシブフットボール連盟の副会長を務めるなど、障害者スポーツへの造詣の深い松本氏によって語られる「駐車場のあるべき姿」は非常に重要な示唆に富んだものだった。対談の会場はJリーグ・サンフレッチェ広島のホームスタジアムである「エディオンピースウイング広島」(広島市中区)。ピッチを一望できる一室にお招きいただいた。

対談収録：2025年5月14日

聞き手：本誌発行人 森井 清

司会：本誌編集長 山本 稔

機械式駐車装置の保守管理は24時間365日体制

——まずは松本様のプロフィールについて伺います。これまでずっとスポーツに打ち込まれていたそうですね。

松本 小学校から始めたバスケットボールを高校まで続けていました。中学校にはバスケットボール部がなかったので、剣道部に所属し、そのとき初段を取得しています。

森井 (資料を確認しながら) 学生時代はボディボードを？

松本 そうなんです。短大時代に毎週のように鳥根県へ行ったり、四国を回ったり、サーフトリップをしていました。

森井 ハワイでも波乗りを楽しまれたことがあるのですね。

松本 はい。そのときはノースショアにも……。

——ノースショア！サーファーなら誰もが憧れる強烈な波で知られるサーフィンの聖地です。そこで波乗りを!?

松本 ノースショアは見に行っただけです(笑)。実際は別のポイントで楽しみました。

森井 後ほど伺いしますが、松本さんは現在、障害者を含め誰もが参加できる「インクルーシブフットボール」に関する活動に精力的に取り組まれています。そのようなスポーツへの造詣の深さが現在の活動につながっているのでしょうか。

松本 ありがとうございます。

——では、はじめに本業について伺います。貴社の創業から現在までの歩み、取り組まれている事業全般についてお話しただけですか。

松本 当社は1980年に、鉄骨組立工事を行う会社として私の父が創業しました。私が入社したのは1995年で、ちょうどその頃から現在の主力事業である機械式駐車装置の設置と保守に関するサービスを始めました。

森井 事業をシフトさせていく過程を目の当たりにされているわけですね。

松本 まさにおっしゃるとおりで、その流れに納得していない社員もいました。しかしながら父は「駐車場事業はこれからの私達を支える事業になる」と強く訴えつづけ、今のかたちを作りました。

——(本誌発行元)サイカパーキング株式会社のグループ会社である日本駐車場救急サービス株式会社(略称「JAFS」)は、同じく機械式駐車装置のメンテナンスを行っていますね。

森井 機械式駐車装置のメンテナンスサービスを全国展開していますが、迅速かつ丁寧なサービスの提供のため、広島地区においては総真興業さんと連携して取り組む体制を取らせていただいています。いつもありがとうございます。

松本 こちらこそ、JAFSさん

にはいつもお世話になっています。機械式駐車装置のメンテナンスに関する知見が深いので、いつも的確なアドバイスをいただいているんです。

森井 こちらも総真興業さんのスピード感にいつも助けられています。

——業務の中には24時間365日の緊急出動体制も含まれていますね。

松本 通常、当番制で5名から6名ほどの体制を組み、夜間も迅速に出動できるよう自宅待機、要請が入り次第現地向かうかたちを採っています。

——困ったときにすぐに駆けつけてくれると嬉しいですが、そのための体制を常にキープするというのは大変ですね。

松本 当社の担当者は全員拠点の近くに住んでるので、広島県内は1時間以内に現地に到着できるようになっていますが、現地で実際に困っている方は当然「すぐ来て!」となりますので、なかなか満足いただくのは難しい面もあります。

森井 非常に共感できるお話です(笑)

松本 中には同じ方が複数回不具合に遭遇してしまうこともあって……本当に偶然なんですけど、同じ方から「またトラブルが出た」と。



松本氏が総真興業で働きはじめたのは、鉄骨組立工事を手掛けていた同社が、機械式駐車装置事業に移行しはじめた時期。ちょうどその頃に撮影したという、同社創業者である父・井上幸夫氏との一枚。



については日々決められた予定を遵守し、未然にトラブルを防げるよう取り組んでいます。

「土曜日にあえて仕事」の意識を変えなくては

——お話を伺っていると、日々の適切なメンテナンスや様々なトラブルへの臨機応変な対応のために、優れた人材の確保や教育が非常に重要であると想像されます。

松本 おっしゃるとおりです。とくに現場での対応は、知識と経験が重要になるのですが、そういった人材の確保は非常に難しいというのが実情です。

森井 駐車場業界全体が人材不足という課題に直面していますから、さらに知見を有した整備スタッフとなるとさらにハードルは高くなりますね。

松本 そうなんです。座学だけでは人材育成は難しいジャンルという現実があり、悩ましいですね。「働き方改革」や「QOL（クオリティ・オブ・ライフ）」が重視される現代社会の中で、円滑な自動車利用を支えることで皆様のお役に立っているという誇りもありますが、支える側の私たちにおいても、QOLを高める体制改革が必要と感じているところです。

森井 従業員の方たちの幸せについて、ですね。

松本 はい。特に私たちのような小規模事業者には切実な課題です。

——具体的に取り組まれていることはありますか？

松本 本当に身近なところでいうと、「週末、土日はしっかり休みましょう」というところから始めました。

森井 それは思い当たることがあります。「職人氣質」が絡む問題では……。

松本 そのとおりです。現場に出ている施工班のスタッフは、これまでは「土曜日に作業して当たり前」といった考え方がありました。同様に祝日も休みではない、と。土曜日や祝日にやらなければならない仕事があるというよりは、逆にあえて仕事を作ろうとするような……。

森井 本人が休みたがらないんですね。土曜日に休む習慣がない。

松本 休めるときにちゃんと休んでねと言っても休まないんです。だから、とにかく土日を休みにすることを徹底しました。どうしても土日に出ないといけなときは、平日に振替休日を取る。かなり無理しながらそれを進めました。

森井 それは素晴らしい取り組みです。この業界、どうしても設置先の事情等で土曜日や日曜日に作業をしなければならないこともありますが、だからといってそれに慣れて常態化させてはいけないということですね。

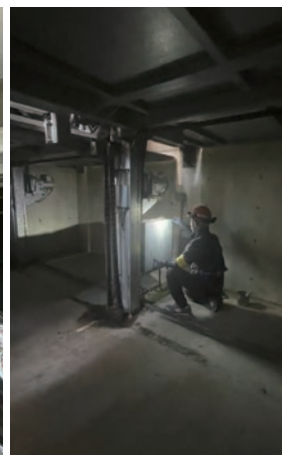
森井 それは……お互いに辛い瞬間ですね。

松本 でも、冬の寒い日や雨が激しく降る日などに対応していると、「ありがとう」と言葉をかけてくださることもあって、そのときは自分たちの仕事に大きなやりがいを感じます。

森井 よくわかります。対処しなければならぬトラブルはひとつひとつ異なるため、簡単ではありませんよね。ときには入庫している自動車を凶らずも傷つけてしまうこともありますし……。

松本 そういったトラブルを避けるためにも、普段のメンテナンスをしっかり行うことが大切ですね。保守管理をお任せいただいている駐車装置に

■ 有限会社総真興業



「不意のトラブルを極力生じさせないためには日々のメンテナンスが重要です。綿密な整備計画のもとで保守管理を行っています」

松本 今、当社の20代の社員の一人は陸上競技の現役選手でもあるんです。ジム通いなど日々のトレーニングを、仕事と両立させながら取り組んでいます。

森井 そういう生き方を、昔ながらの職人気質の人にも理解してもらおうと。

松本 それぞれの社員のスタンスを認め合える会社でありたいと思っています。

森井 同感です。

——ご両親の後を継いで現職に就かれた際は、昭和の職人と今の若い世代との間に挟まれご苦労もあったのではないのでしょうか。

松本 今振り返れば苦労だったのかな……と思うこともあります。父のような率い方をできない私とは信頼関係を築くことができないと、辞めていった従業員もいました。ずっと悩み続けながら20年近く、日々、目の前の仕事をこなしてきたというのが正直なところ。もっと勉強しておけばよかったという思いは今も消えません。

「駐車場がなく困っている」の本当の意味

——そのような中、今では松本さんならではのカラーも明確に打ち出されています。その一つが「駐車場と福祉」をテーマにした取り組みです。インクルーシブフットボールへの関わりが関係しているようですね。

松本 はい。障害者サッカーやパラスポーツの環境づくりに取り組んでいると、自身の障害や社会の障壁をものともせず、スポーツを楽しむ方たちに出会います。彼らは自ら運転したり、福祉車両を手配したり、公共交通機関を利用したりしながら会場まで来られます。そんな一人から、声をかけられたんです。

森井 どのような……？

松本 「駐車場がなくてとても困っています」と。私は会場づくり、場づくりに力を注いできましたが、その一方で彼らの会場までのアクセスについて考えていなかったと、その時にハッとしたんです。

森井 なるほど。

松本 サッカーの試合やイベントなどを行うとき、皆さんちゃんと集合時間に来場されるんです。遅れずに、当たり前のように……。私は皆さんが元気に到着するその場面しか見ていないから、そこにたどり着くまでの苦労に思いが至っていませんでした。

森井 車椅子対応の車室を設けている駐車場もありますが、十分ではないということですね。

松本 はい。私はこの点をもっと知らなければならぬと考え、広島国際大学 総合リハビリテーション学部 リハビリテーション学科 義肢装具学専攻の谷口公友准教授と共に、障害がある方の駐車場事情について情報交換を行っています。

森井 それは非常に意義深い取り組みです。素晴らしい行動力だ。

松本 でも、まだまだ取り組みを始めたばかりです。サービスを提供する側が一方的に考えるのではなく、当事者の課題や背景を学び、未来と一緒に作っていくことが大切だと思います。行き過ぎた配慮やサービスはその



人の可能性や自尊心を奪ってしまいますので。

森井 とても重要な指摘だと思います。駐車場内に車椅子用の広い車室を設けても、実際に使う人にとって使いやすいものでなければ意味がありませんね。

松本 おっしゃるとおりです。私が実際に車椅子を使う方にお話を聞いたところ、たとえば建物の入口のそばに車椅子用の車室がなくてもいいと言うんです。

森井 そうなんですか？ 必須条件のようにも思えますが……。

松本 もちろん近くにあるに越したことはないのですが、それより重要なのは、入口まで屋根があるかだということです。

森井 ああ、それは確かに。雨が降っているときに濡れずに移動できることが重要ということですね。

松本 そうです。クルマから降りて車椅子に乗り換えて、そして移動するとき、傘を差しながらというわけにはいかないのです。どんなに入口に近いとしても、屋根が必要です。

森井 お話を聞けば当然と思うことでも、それに気づけるかどうかが問題ですね。段差をなくして「バリアフリーです」ではないと。

松本 駐車場は「自分の好きな場所へ、好きなタイミングで行き、大切な時を過ごす」という「当たり前」を支える重要な施設です。障害や環境の違いに関わら



<https://soushinkougyou.hp.peraichi.com/>



「車椅子用車室には屋根が必要だということに気づき、誰もが自由に移動できる社会にしていきたい」

ず、誰もが自由に移動を楽しめる社会にしたいと思っていますし、それを支える会社でありたいと思っています。

誰もが参加できる 「インクルーシブフットボール」

—今のお話にも深く関わりますが、ここで松本さんのライフワークともいえる「インクルーシブフットボール」に関する取り組みについてお話しいただけますか？
現在は一般社団法人広島県インクルーシブフットボール連盟の理事・副会長を務められています。

松本 ありがとうございます。「インクルーシブ」とは「すべてを含んだ／包括的

な／包摂社会」などの意味があります。つまり「インクルーシブフットボール」は「障害の有無に関係なく、すべてを包括したサッカー」と説明できます。

森井 「誰もが参加できること」を重視されている。

松本 そのとおりです。広島には「A-Pfeile広島」という全国でも珍しい障害者サッカーのクラブチームがあり、私はスタッフとして運営に携わっているのですが、チーム発足当初は障害の種目ごとの大会はありませんでした。が、あるときA-Pfeile広島BFC（ブラインドサッカー）のユニフォームのスポンサー会社の社長が「大会を作ろう」と声をかけてくださったんです。

森井 なるほど。

松本 全国から様々な種目の障害者サッカーの選手達を招待し大会を開催することになったのですが、これを継続していくには環境づくりが必要と感じ、2018年に「広島県インクルーシブフットボール連盟」を立ち上げました。

森井 そこで組織名に「インクルーシ

ブ」を掲げたのですね。

松本 はい。これは将来、「障害者」や「健常者」という言葉も不要な共生社会の実現を目指してのことです。それが達成されればこのような活動をする団体もなくてよくなりますから、その意味では解散することを目標に作られた団体でもあるんです。現在では広島県や広島市、広島県バラスポーツ協会、広島県サッカー協会など様々な機関と連携を取りながら活動しています。

森井 どんどん活動が広がっているのですね。敬意を表したいと思います。

松本 ありがとうございます。でも、今はまだ私たちの活動を知らない方が……自身の障害や環境などによって情報が届いていない方がたくさんいると思います。そのような人たちに、今はまだ家に閉じこもっている人たちに知ってほしいと思っています。本人やご家族に知ってもらい、「これだったらできるかもしれない」と感じてもらえるきっかけをたくさん届けたいと思っています。

森井 「インクルーシブ」という名称が持つ意味がよくわかります。

松本 私たちの活動には、年齢や性別、

■ インクルーシブフットボールの取り組み



松本氏が理事・副会長を務め広島県インクルーシブフットボール連盟は、障害者サッカーなど様々な取り組みを展開している。写真下段右には日本障がい者サッカー連盟の北沢 豪会長の姿も。

■ A-pfeile広島： <https://a-pfeile.jimdo.free.com/>

■ 日本ウォーキングフットボール連盟： <https://jwfl.jp/>

■ 公益社団法人広島県バラスポーツ協会： <https://hpsa.info/>

■ 一般社団法人広島県インクルーシブフットボール連盟： <https://hiff.football/>

■ 一般社団法人日本障がい者サッカー連盟： <https://www.jiff.football/>



広島県インクルーシブフットボール連盟の活動が評価され、令和4年度「障害者の生涯学習支援活動」に係る文部科学大臣表彰を受賞した。向かって右から2人目に松本氏。



障害の有無に関係なく誰でも参加可能です。でも、この「誰でも」に自分が本当に

入っているのかどうか分からないという人たちがいて、これまでスポーツチームに入りたい、習い事をしたいとなったときに「うちではちょっと……」と断られたりした経験があったりして、やりたくてもできなかった人たちがたくさんいるんです。そんな人のために、安全で安心な場所を作りたいと思っています。

森井 駐車場は、そうして踏み出した一歩を支える施設でなければならぬと、改めて思いました。

原点は「走るとファール」のウォーキングフットボール

――松本さんのこうした活動の原点は「ウォーキングフットボール」との出会いにあるそうですね。

松本 はい。ウォーキングフットボールはイングランド発祥のサッカーで、走る・ぶつかる・ヘディングなどはすべて

インクルーシブフットボールの活動など、さまざまなかたちで障害者スポーツに携わった貴重な知見は、今後の駐車場のあり方を考えるとき、大きな財産になる。大いに刺激を受けた。

ファールになります。歩くのは1秒間に2歩ぐらいのスピード感です。

森井 スポーツの経験がない人、運動が苦手な人でも参加できそうですね。

松本 まさにそのとおりで、一番大切なルールは「笑顔で楽しくプレーすること」なんです。名前を呼び合うことから始めて、次に「何が得意ですか」「どんなボールだったら取れますか」と、お互いのできること、できないことを知っていきます。

森井 コミュニケーションが重要なのはまさにスポーツ共通ですね。

松本 おっしゃるとおりです。そして始めてみることで体力づくりになったり、病気の予防につながったり、やってみたら「次は走ってみたい」とか、「もっとサッカーがしたい」といった次の一歩につながったりということも期待できます。ウォーキングフットボールを通して私も少しずつ学んでいます。

森井 私もスポーツの力を信じる一人

として深く感銘を受けます。素晴らしい社会貢献です。

――それでは最後にお話を戻し、貴社の今後の展望についてお聞きしたいと思います。

松本 既存事業である機械式駐車装置に関連する事業を大切にしながら、これからは私たちの今日までの経験を活かして、車いすユーザーをはじめとした障害のある方たちに向けた製品開発にも取り組んでいきたいと考えています。両親から受け継いだこれまでの取引先様とのご縁を大切にし、駐車場業界の発展に微力ながら関わらせていただきたいと思います。

森井 インクルーシブフットボールの取り組みを含め、松本さんが培ってきた知見をぜひこれからの駐車場の発展に活かしていただきたいと思います。今日は駐車場に関わる一人として、非常に重要な示唆に富んだお話をうかがうことができました。ありがとうございました。PP

聞き手：本誌発行人 森井 清（もりい きよし）

1993年東海大学大学院体育学研究科修了後、外資系保険会社を経て2002年に日本駐車場救急サービス株式会社入社。2005年同社代表取締役社長就任。2014年モリスコーポレーション株式会社代表取締役社長就任。2008年サイカパーキング株式会社監査役就任。2016年同社代表取締役社長就任。

過去の対談記事をWEBで公開しています

パーキングプレス 対談 で検索

または <http://www.parkingpress.jp/taidan/> にアクセス

